

『ベルギーの友の思い出』(1893)について

山中 哲夫

Tetsuo YAMANAKA

(外国語教室)

はじめに

ボードレーがベルギーとベルギー人に対して罵詈雑言を浴びせかけたことは有名な話である。体調を崩して機嫌が悪かったのと、そのベルギー滞在が悲惨であったためであろうが、しかしベルギーの国民性の一面に触れていなくもない。ともかく、さんざん罵倒した挙句、彼は「それに文学というものが存在しない、少なくともフランス語で書かれた文学はない」とまで言い切っている。⁽¹⁾それからおよそ二十年後、ようやくそのベルギーにも文芸復興の兆しが見えはじめた。文芸復興は文芸雑誌刊行となって現われた。1880年代初めにマックス・ワレル、ジョルジュ・ロデンバック、アルベール・ジロー、エミール・ヴェルハーレンなどによって「若きベルギー」*La Jeune Belgique*が、またエドモン・ピカール、オクターヴ・モースによって「現代芸術」*L'Art moderne*が、さらに86年にはアルベール・モッケルによって「ワロニー」*Wallonie*が、相次いで創刊された。これらの雑誌は当時の文学の潮流に呼応して、社会主義的あるいは象徴主義的傾向が強いものであった。そして80年代末になると、象徴主義的傾向がますます強まっていった。これらベルギーの青年詩人たちが共に師表として仰いだのは、当然のことながら、それはヴィリエ・ド・リラダンであり、ヴェルレーヌであり、とりわけマラルメであった。

1890年2月、マラルメはこれらの詩人たちの招きに応じて、ベルギー各地に赴き、講演を行った。ブリュッセル(2月11日)、アンヴェール(2月12日)、ガン(2月13日)、リエージュ(2月14日)、再びブリュッセル(2月15日)、そして最後にブリュージュ(2月17日)。演題は「ヴィリエ・ド・リラダン」であった。この講演は前出の雑誌の一つ「現代芸術」2月23日号、3月2日号に連載された。この講演旅行によってマラルメは多くのベルギー詩人たちの知遇を得た。1893年、ブリュージュにマラルメを呼んだ地元の文学サークル「エクセルシオール」*L'Excelsior*が、サークル創立十周年を記念してマラルメに詩篇を依頼してきた。彼は早速ソネ一篇を書き送った。それが『ベルギーの友の思い出』*Remémoration d'amis belges*である。当初の表題は『ソネ、エクセルシオールの人々へ』*Sonnet/à Ceux de l'Excelsior*となっていたが、1898年の『詩集』(デマン版)に収められる際に現在の表題に改められた。マラルメ自らが草した『詩集』の「書誌」には、「講演をし、かつ知遇を得たエクセルシオールの「黄金の書」(貴顕名録)に、このソネを送るのは私の喜びとするところである」とあるが、⁽²⁾この「黄金の書」(貴顕名録)*livre d'Or*とは「エクセルシオール」十周年記念刊行物のことである。マラルメ自身はあ

まりあからさまに語っていないが、ブリュージュも含め、ベルギー各地での講演はさんざんであったようだ。⁽³⁾これがボードレールだったなら、盛んに毒づいて、詩篇依頼など一蹴しただろう。しかもマラルメが送ったソネは、刊行物末尾の目立たないところ、文学とは何ら関係ない細胞説に関する記事と、北アフリカの魅力を讃える記事との間にはさまれた恰好で割り付けられた。⁽⁴⁾

このソネは『詩集』中でもとりわけ素晴らしい作品というわけではないが、しかし忘れ難い魅力を湛えた作品であることには変りない。特に最初の四行詩は中世の水都、「北のヴェネツィア」と呼ばれたブリュージュの古色蒼然とした佇いを巧みに暗示していて、きわめて印象深い。以下、順を追ってこの作品を読み解いてゆきたい。

I. 第一詩節について

À des heures et sans que tel souffle l'émeuve
Toute la vétusté presque couleur encens
Comme furtive d'elle et visible je sens
Que se dévêt pli selon pli la pierre veuve

この第一詩節には多くの問題点がある。もっとも難解な詩節と言えるだろう。冒頭の *A des heures* は奇異な感じがする。通常のフランス語ではあまり見かけない表現である。ヌーレはこれを *A certaines heures* と解しているが、⁽⁵⁾ これもしっくりこない。因みに英訳を見ると、《*At some hours*》となっていて、殆ど直訳である。⁽⁶⁾ 英語の表現としてもノーマルではあるまい。ともかく意味としては「ある数時間」ということだろう。先人の邦訳では《幾時もまた幾時も》(鈴木信太郎訳)⁽⁷⁾あるいは《時おりに》(立仙順朗訳)⁽⁸⁾となっている。ところでこのソネがブリュージュの町を描いていることは第三詩節を読めば明白である。*Bruges* という名がそのまま使われている。(後出)古い石の家並み、ロゼール川とおぼしき運河、そこに浮ぶ白鳥など、ブリュージュを構成する主な要素が出揃っている。有名なベギーヌ会修道院や物見櫓を兼ねた鐘楼(ベフロワ)は出て来ないが、十分にその存在は予感される。それで先ほどの *A des heures* だが、この表現に論者は鐘楼から鳴らされる「合奏鐘」*carillon* を感じるのである。ブリュージュは水の町であると同時に鐘の町でもある。この都市を訪れて鐘の音に言及しない者はいない。*des heures* という不定冠詞の複数形は *heures canoniales* (聖務日課の1日8回の定時課)、*livres d'heures* (時禱書)という言葉を連想させる。*A des heures* に聖務日課の節目節目を告げる教会の鐘の音が思い起されるのである。もちろん、これには明白な根拠があるわけではない。たんなる臆測にすぎないが。

次の *sans que tel souffle l'émeuve* の *tel* はピエール・シトロンのように《*quelconque*》と解して一応はよさそうである。⁽⁹⁾ すなわち「何かある風(息吹き)のようなもの」ということである。もっとも、*tel* を「そのような」と解釈すれば、*souffle* (風, 息吹き)は *heures* と同格になり、中世の昔から絶えず鳴り響きつづける教会の鐘の音が、風に運ばれて(音=風)、町の家々に届する、といった情景が髣髴としてくるだろう。ところで、曖昧な *A des heures, tel souffle* という表現をいきなり冒頭に持ってきたマラルメの意図は何であったのか。事物の輪郭も臃げな、十三世紀の宗教的雰囲気がおまだ漂っている昔

日の水都、時代の霧に包まれて、生きているのか死んでいるのか定かでない模糊としたこの中世の都市を、これら二つの言葉でまず初めに暗示したのであろう。この暗示は、詩行が進行してゆくにつれて、次第に明確な形に変わってゆく。ところで先の *tel souffle l'émeuve* の目的語にあたる *l'* は具体的には何を指しているのか。何を「動かさない」（「動揺させない」）のか。次の詩行はこうなっている — *Toute la vétusté presque couleur encens* 現在では、目的語の *l'* をこの *Toute la vétusté* とする説と、この詩節最後に現われる *la pierre veuve* とする説とに分かれている。⁽¹⁰⁾ *vétusté* とは「古くなったこと」あるいは「古くなった状態」を表わす文語である。ロベール辞典によれば *vétusté* の形容詞 *vétuste* は特に建造物について言われる、とある。建物の老朽化した状態である。これがブリュージュにある川岸の建物の壁を指していることは論を俟たない。マラルメがソネの表題に、より一般的な *souvenir* を使わずに、わざわざ古語となった *remémoration* を選んだり、文語の *vétusté* を使ったりしているのは、ブリュージュの（あるいはベルギーの）歴史的古さと文学的雰囲気伝えるためであったろうか。あえて「抹香臭い」と言ってもよいこの古都の佇いを、マラルメは *Toute la vétusté presque couleur encens* という表現で現わした。すなわち建物と色彩と香煙とが混ざり合った状態である。家々の壁の古さ（それは色彩に表われている）が香炉の薫香のようにあたりに漂っているのである。「壁の溶解」と言ってもよい。ここで先ほどの *l'* が何を指すのかの問題になるが、ヌーレは次のように解釈している。

《石の古さに由来するこの風（息吹き）は、壁の石から流れてきたものだが、しかし石はそれに動じることはない。》⁽¹¹⁾

つまりヌーレは *l'* を石と考えている。しかし上のヌーレ解釈に反論を唱える批評家もいる。*tel souffle* についてガルニエ版の校訂者ファーヴルはこう言っている。《E.ヌーレが唱えた解釈はまったく馬鹿げている。霧はひとりで立ち昇るのであって、いかなる風の干渉もない。》⁽¹²⁾ 彼は霧の存在を認め、*sans que tel souffle l'émeuve* を風が吹かない状態と考える。風は存在しないのだ。そよとも風の吹かぬ中で霧が立ちこめていると言う。霧の存在はあながち否定はできない。このことは第四詩行のところで述べる。確かにヌーレの解釈には多少無理があるように思われる。しかしヌーレを手厳しく批判したファーヴルも、例の *l'* は石と見做している。⁽¹³⁾ 他の研究者、例えばモーロンもシャッセも同様に考えている。⁽¹⁴⁾ だが彼らの誰ひとり、その明快な理由を述べていない。不思議なことだ。これに対して、ピエール・シトロンは簡潔に次のように言い切っている。

《第一詩行はかなり意味がはっきりしていて、それはこういう意味である — 「しばしの時間、風の息吹きのようなものも、この町の古さを少しも揺り動かすことなく」*l'* を第四詩行の「石」に結びつけるのは、マラルメの統辞法をいたずらに曲解することだ。》⁽¹⁵⁾

シトロンは *Toute la vétusté* 説に与している。このソネの英訳者A.ハートレーも同様である。⁽¹⁶⁾ この問題は後半の第三・第四詩行の読み方によって、かなりはっきりした解答が得られるのではあるまいか。ここで再び後半の二詩行を引用しよう。

Comme furtive d'elle et visible je sens
Que se devêt pli selon pli la pierre veuve

この二詩行を一括して引用したのは、この部分が謂わば挿入節のような役目を果して、括弧に括られるべき個所であるからだ。したがって、*Toute la vétusté* は文全体の主格であるが、その述部はこの第一詩節ではまだ示されていないことになる。まず先に分り易く読み下して訳出しておこう——「まるで人目を忍ぶようにして、そして目に見えるもののように、寡婦となった石が、ひと襷ひと襷、衣を脱いでゆくのを、私は感じる。」*furtive* (人目を忍ぶ)、*visible* (目に見える) を *pierre veuve* (寡婦となった石) にかかるものとして解釈したが、逆に前詩行冒頭の *Toute la vétusté* にかかると考える研究者も少なくない。⁽¹⁷⁾ 「ひと襷ひと襷、衣を脱いでゆく」という表現には霧の存在が感じられる。前に触れた *couleur encens* (香炉の色) はなるほど建物の古さそれ自体を表わす表現であったが(「殆ど香炉の色となったすべての老朽状態」)、実際には霧がかかっている、それをマラルメはこう表現したと言えなくもないのである(マラルメのブリュージュ訪問は二月であった)。*furtive=visible* を *pierre* にかけるか、*vétusté* にかけるかで、解釈がまったく異なってくる。前者であれば、霧が少しずつ霽れてきて、霧の間から建物の石が透き見えてくる、という意味になり、後者であれば、石自体がその老朽性のために、霧状に融解し、その纏っている古い衣を少しずつ脱ぎはじめる、という意味になる。しかし先の散文訳では示さなかったが、*d'elle* の存在を無視するわけにはいかない。*furtive d'elle* とは考えにくい。これは次の詩行の *se devêt* にかかるものであろう。この動詞の主格は明らかに *la pierre* であるので、*d'elle* は *la pierre* 以外のもの、すなわちここでは *Toute la vétusté* と考える他はなく、そうなると、前に問題になった *l'* も *d'elle* と同格、つまり *Toute la vétusté* と解する方が自然であるようだ。しかしながら、これはあくまで文法上の問題である。霧が霽れて建物の壁が見えてくるのか、建物の壁が融解し、そこから悠久の時間が目に見える霧となって立ち昇るのか、そのどちらかであるかは依然として判断としない。恰度、輪郭もおぼろな、万物が溶け合ったようなブリュージュという町の佇いそのもののように。論者は前者の解釈を取りたいが、後者と考える評者もいる。しかもこちらの方が詩的解釈としては魅力的なのだ。リシャルは言う、《時間そのものがここでは霧となって、「寡婦の石」から「ひと襷ひと襷」脱ぐように抜け出るのだ。》⁽¹⁸⁾ 果して霧の中に石が見えるのか、石から霧が発生したのか。まったく異なるとは言え、この二つの解釈が共存し得ないというわけではない。まだマラルメに関する資料も整っていない頃に、わずかの材料だけで見事なマラルメ論を書き上げた A. チボーデは、この詩節を次のように要約している。《やわらかく立ちこめて香煙の色となったこの煙霧の中で、時間は物質化し、夏のある日、北方の町を漂う。この煙霧は衣を脱いでゆく石が発散させたかのように見える。》(チボーデは季節を夏と考えている)⁽¹⁹⁾ 薄い煙霧のような霧のヴェールを透かして蒼古とした壁の石が見える。しかしこの霧は、石の古さそのものから発散しているかに思える。チボーデ流のこのような要約は、あまりに粗雑すぎるであろうか。

最後に個々の単語について二点ほど指摘しておきたい。

pli selon pli (ひと襷ひと襷) の *selon* はマラルメ独特の用法で、本来ならば *pli à pli* である。*selon* を使ったのは、その滑るような〔S〕音と、流れるような〔l〕音によ

て、人知れず霧のヴェール (*Toute la vétusté*) を脱いでゆく石の様子を示唆したかったためであろう。また pli (襷) という語は、ブリュージュがレース織物の特産地であることを想起させる。霧は白い糸レースの織物でもあるのだ。さらにまた、後にすぐ見るように、家々の窓という窓は、この糸レースの白いカーテンで覆われているのである。

la pierre veuve の *veuve* (寡婦の) とはどういう意味であろうか。veuf (veuve) とは本来ラテン語の *vidua*, *viduus* から来た語で、*vide*, *privé de* を意味している。《何ものかを失った》という形容詞である。周知の通り、壁の石は霧のヴェールを脱ぎ捨ててゆくわけで、そのような状況をこの *veuve* という語で表わしたと考えることができる。しかし論者はこの語にジョルジュ・ロデンバックの『死都ブリュージュ』*Bruges-la-Morte* の残響を聞く。いや、小説のみならず、ロデンバックの詩句の数々が、このソネ全体に微かに鳴り響いているように思えてならないのだ。ロデンバックの名をここで持ち出すのはいかにも唐突のようだが、これには根拠がある。*veuve* という語について言えば、それは小説の序奏において主旋律を暗示するように奏でられている。小説の冒頭部分を引用しよう。

《日が傾きかけていた。窓という窓に紗のカーテンがかかり、しんと静まりかえった広い家の廊下に薄闇が迫っていた。(…………) 部屋の窓は、ロゼール川岸通りに面していた。この川岸通り沿いに家があって、水に影を映していた。(…………) 妻が死んで、直ぐ、ブリュージュに来て、ここに居を定めてから、ああ、もう五年にもなるのだ。そこでユークは、自分に言って聞かせるように、くり返すのだった。「やもめ、そう、やもめなんだ。おれは、やもめなんだ」と。取り返しのつかぬ語だった。寸づまりで、短音節で、余韻のない語だった。妙にいびつで、半端者をさし示すには、恰好の語だった。》(『死都ブリュージュ』田辺保訳、傍点はロデンバック)

《寸づまりで、短音節で、余韻のない》《妙にいびつで、半端者をさし示す》この語を、マラルメは詩行の終りの脚韻とした。しかも最初の詩節をしめくくる重要な最後の脚韻として配置した。きわめて目立つ位置に、きわめて目立つ語を持ってきたのは、ロデンバックという詩人と、ブリュージュという古都を一躍有名にした彼の小説を読者に想起してもらいたかったためではなかろうか。次の小説の一節は、この詩節と明らかに呼応し合っている — 《それにまた、町のどの通りでも、家々の正面が無限の細かい色合いの変化に富んでいるのだ。(…………) とにかくこの全体から、灰色が発散し、漂い、岸壁みたいに並んだ石の壁沿いに広がって行くのである。(…………) まるで、霧がいつもかかっているみたいだった。(…………) 死んだ時間の灰や歳月の砂時計の埃が溜まりに溜まり (…………) 》(同訳)⁽²¹⁾ ロデンバックの詩作品からも一つだけ引用しよう。マラルメのソネの第一・第二詩行を思い起していただきたい。

A l'heure délicate où comme de l'encens

Le jour se décompose en molles vapeurs bleues,

(*Du Silence XVII*, イタリアック体は論者)

マラルメとロデンバックの結びつきは比較的古く、1878年頃にテオドール・バンヴィルの

家で出会ったのが始まりである。マラルメが最初に知り合ったベルギー詩人である。以来、二人の友情、というより師弟関係は奇しくも同じ年に二人が亡くなるまで続いた。1888年、先に挙げた詩集 *Du Silence* を受け取ったマラルメは、ロデンバックの繊細微妙な詩篇を賞讃して、彼に宛てた手紙の中で、《ですから事物に直接触れずにそれを指し示す繊細な指が必要なんですね。いかなる現実もあとに残りませんから、書くはなから、それは気化していったのです》と評した。⁽²³⁾ また別のインタビューの際には、ロデンバックの詩について、《私は彼の芸術をフランドルのレース織物や金銀細工の信心用具に譬えたい》と語っている。⁽²⁴⁾ 気候風土と精神風土とによって培われたアルチザンの手になる精妙な作品、それはマラルメとロデンバックの往復書簡集を編集出版したフランソワ・ルーションが述べているように、まことに《その外部世界は彼にあってはもはや明確な輪郭を持たず、それは非物質化されたもののよう》である。⁽²⁵⁾ 詩集を贈られてから二年後、彼はブリュージュを訪れる。この都市がロデンバックの詩をマラルメの心に想起させなかったとは言えまい（因みに、以前に何度も講演依頼を受けながら、渋っていたマラルメが、ついに講演を承諾したのも、新たにブリュージュが講演地の一つに加えられたためではなかったろうか。また、彼はガンでロデンバックとの再会を楽しみにしていたが、果せなかった）。あえて言えば、ロデンバックの詩を通してブリュージュを見ていたのではあるまいか。ブリュージュ訪問後、やはり二年経って、今度はロデンバックから小説『死都ブリュージュ』を受け取る。そして次の年には「エクセルシオール」からの詩篇の懇請である。ロデンバックの作品の残響がここに鳴っていると考え方がかえって自然であるように思われる。表題の *Remémoration* とは「思い出すこと」あるいは「思い出させること」という意味だが、しかしそれはたんなる思い出というようなものではない。リトレ辞典ではこのように説明されている。《意思的に介入することによって起る記憶の特別な動き。この動きに対しては追憶（レミニサンス）という語があてられるが、しかし *remémoration* という名の方がより正確である。》つまりぼんやりと想起すということではなく、かなり意識的に記憶しており、かつ意識的に想起す、という行為、これが *remémoration* である。この場合、想起す対象は言うまでもなくブリュージュで出会った若い詩人たちなのだが、しかし彼らの背後にはブリュージュがある。すなわちロデンバックの作品世界がある。マラルメはこれを想起していたのではあるまいか。第一詩節全体を覆っている霧のような曖昧さは、まさしくロデンバックの作品の特性である。ベルギー文学の復興にロデンバックは重要な役割を果たした。ロデンバックとの関係がなかったならば、ベルギー講演旅行それ自体が実現不可能であったかもしれない。「死都ブリュージュ」Bruges-la-Morte とは、「死んだ女ブリュージュ」という意味である。死んだ女のように沈黙し、憂いにふさぐ家々の壁の石を、今度はマラルメが *veuve*（やもめ）と呼んだ。そう考えられないだろうか。⁽²⁶⁾

II. 第二詩節について

Flotte ou semble par soi n'apporter une preuve
 Sinon d'épandre pour baume antique le temps
 Nous immémoriaux quelques-uns si contents
 Sur la soudaineté de notre amitié neuve

例によって順を追って検討していこう。前詩節ほどの問題はここにはない。

最初の動詞 *Flotte, semble* の主格は、すでに述べた通り、前詩節で宙ぶらりんになっていた *Toute la vétusté* である。壁の古さが香炉の薫香となって霧のようにあちこちに「漂っている」(*Flotte*)。あるいは、「自ら～以外の証しをもたらししていないように思える」(*semble par soi n'apporter une preuve*～)。すなわち、*Toute la vétusté* はただひとえに次のことを証明するためだけに漂っているように思えるのである。「次のこと」とは何か。それが第二詩行以下である。第三詩行は二種類の旧稿においては括弧に括られていた。ここは挿入部分である。したがって、その第三詩行を除いた形で再度引用してみる。

Sinon d'épandre pour baume antique le temps
(……………)

Sur la soudaineté de notre amitié neuve

「(殆ど香炉の薫香の色となった壁の古さすべてが) 漂っている、あるいはそれは、突然のわれわれの新たな友情に、古代の芳香として時間を撒き散らしている証しのみをもたらししているように思われる。」— 散文的に訳出したので、それこそ原文のもつ芳香性が失われてしまっているが、だいたいこのような意味である。もっと分かり易く言い直すならば、はじめてブリュージュに来て、未知の「エクセルシオール」の人々と出会い、そこで新しい友情が結ばれたが、幽玄な古都の佇いによって、この突然の友情も、まるで旧知のような親しみを帯びたものとなった、ということになろう。括弧に入れるべきものとして除いた第三詩行中に、*immémoriaux* (遠い昔からの) という表現があるが、それはこのことを示している。

Nous immémoriaux quelques-uns si contents

Nous と *quelques-uns* の関係は、ファーヴルも指摘しているように、⁽²⁷⁾「われわれの中の数人」という意味ではなく、「われわれ数人」という意味にとらえるべきである。ここでは動詞 *être* が省略されているが、*contents* とは、もちろん、このように友情関係で結ばれたことを指している。この第二詩節は言葉の解釈においても、統辞上の解釈においても、第一詩節のような曖昧な部分は殆どない。ブリュージュの川べりを歩く出会ったばかりのわれわれに、ブリュージュの古さが、祝福の、あるいは聖別の香を振り撒いている。そのために、ずっと昔から知っていた人々のような錯覚を詩人にあたえるのである。

Ⅲ. 第三詩節について

Ô très chers rencontrés en le jamais banal
Bruges multipliant l'aube au défunt canal
Avec la promenade éparse de maint cygne

ここではじめて「ブリュージュ」(*Bruges*) という固有名詞が登場する。

O très chers rencontrés —「おお、出会った愛しい者たちよ」これが文学サークル

「エクセルシオール」のメンバーを指すことは言うまでもない。その出会った場所が *en le jamais banal / Bruges* (永遠に凡庸ではないブリュージュで) というわけである。マラルメはロデンバックの影響もあってか、ブリュージュ訪問を特に楽しみにしていた(《ベルギーを見てみたいのです、とりわけブリュージュを》)。講演はすでに触れたように、必ずしも成功であったとは言い難いが、ブリュージュからブリュッセルへ帰る汽車の中で、妻と娘に宛てて、《ブリュージュ！ これは奇蹟の町だ。午前中ずっとおまえたちがそばに居てくれたなら……》⁽²⁹⁾と書き送っている。《幽霊の町、殆どそっくり保存されたミイラの町、死の臭いがする》⁽³⁰⁾と毒づいたボードレールとは何という相違であろうか。《永遠に凡庸ではない》とわざわざマラルメが断ったのは、もちろん *banal-canal* の脚韻の関係もあったろうが、また一つには、その凡庸さをさんざんきおろしたボードレールに反駁する意味もあったのかもしれない。三十年ほど前の出来事ではあるけれども、ともかくこの詩節で特徴的なのは、具体的事物を指し示す名詞が少なかった前二詩節に比べて、明確なイメージを喚起する語が使用されている点である。*souffle, vétusté, couleur, pierre, baume, temps, amitié* といった抽象ないしは抽象に近い語の連続が、ここでは、*canal, cygne* という具体的な、現実味を帯びた語に取って代られる。この二語の出現は、まるで *Bruges* という固有名詞の出現によって促されたかのように見える。*canal* も *cygne* も実際にマラルメが自分の目で見えて確かめたものであろう。フランソワ・ヴェルムルーの『ブリュージュでのマラルメ』によれば、「エクセルシオール」での夜の講演の翌日、マラルメは誘われてブリュージュ散策に出たらしい。《講演会を組織した主なメンバーが夜の講演者を連れて、まどろむ通りや川岸を歩いた。》⁽³¹⁾ 第二・第三詩行を再度引用しよう。

Bruges multipliant l'aube au défunt canal
Avec la promenade éparse de maint cygne

「ブリュージュ」という固有名詞と合わせて、*défunt canal* (亡き運河) という表現に、ロデンバックの『死都ブリュージュ』を思い浮べることはもちろん自然なことであるし、事実、多くの研究者がそのことを指摘している。しかしすでに述べたように、小説との関係ばかりでなく、ロデンバックの詩作品との関係も無視できないだろう。例えば次の詩句などはどうであろうか。

Les cygnes blancs, dans les canaux des villes mortes,
Parmi l'eau pâle où les vieux murs sont décalqués
(*Du Silence XVII*)⁽³²⁾

先の *canal* を形容する語として、マラルメが *défunt* という文語表現を使ったのは、第一詩節で見た *Toute la vétusté* と同じ理由によるものであろう。「ブリュージュは亡き運河に曙の数を増し、その運河には、幾多の白鳥があちこちにさすらっている。」— 第二・第三詩行を訳出するとこうなる。この中でもっとも問題となるのは *l'aube* (曙) であろう。周知の通り、マラルメは講演の翌日、ブリュージュの文人たちと町を散策した。これは午後だと考えられる。季節は二月である。それにもかかわらず、ソネでは *l'aube* となってい

る。必ずしも現実通りの時間がソネで描かれているわけではないし、チボードなどは前述の通り季節を夏としている。ソネが一つのフィクションの上に成り立ったものだとすれば、この時間のずれはそれほど不思議なものではない。実際の散策が冬の午後であったとしても、ソネが夏の明け方として描かれていても少しもおかしくはないのである。あくまで現実に則して解釈しようとするれば、ヌーレのように、語源的なところにその解釈方法を見出すより他はないだろう。《しかしながら、Aube は朝を指しているのではない、と考える。これは、語源的には、白い色で、数多くの白鳥がブリュージュの運河で「数を増して」いった色である。》⁽³³⁾ 確かに *aube* はラテン語の白色を意味する女性形 *alba* (←*albus*) に由来する語である。つまりヌーレによれば、ただたんに白鳥が運河にひろがって、その点に在る白い色を撒き散らしている、というほどの意味になる。*Avec* を *canal* にかげずに、*multipliant* にかけているわけである。論者は最終詩節を考慮すると、ここはそのまま *aube* (曙) でよいのではないかと考える。*aube-cygne* は最終詩節での「飛翔」や「光の放散」を導くものとして重要な機能を有している。時刻や季節の穿鑿よりも、むしろこの機能に目を向けるべきだろう。*aube-cygne*、さらには *multipliant-promenade éparse*、これらは最終部での天稟の発光を準備し、予感させる語であり、この詩節を最終詩節と連動させる役目を担っている(統辞法上も、この詩節は次の詩節とひと続きになっている)。

maint cygne— ここにも文語表現が使われている。*maint* は現在では複数形で多く使用されるが、マラルメはこれを好んで単数形で使う。

概してマラルメのソネはその書き出しが素晴らしい。そして後半の二つの三行詩への移行も巧みで、素晴らしい書き出しに見合った見事な結末へと読者を導き入れる。ところが、このソネでは最初の四行詩などはいかにもマラルメらしい緊張感を湛えているが、この第三詩行では少しその緊張感が弛んでいるように感じられる。《*jamais banal / Bruges* は、残念ながら、これは月並みである》(シトロン)⁽³⁴⁾ 一度弛んでしまった弓をもう一度引き直して、冒頭の水準へ再び引き上げることができるだろうか。最終詩節にはその努力が窺われるが、しかしながら一度失った濃密さは返ってこないものようである。もちろん、これはマラルメの他の数ある優れたソネに比較して、という意味であって、『ベルギーの友の思い出』という作品そのものが凡庸であるということではない。

IV. 第四詩節について

Quand solennellement cette cité m'apprit
Lesquels entre ses fils un autre vol désigne
A prompte irradiier ainsi qu'aile l'esprit.

A des heures ではじまった長い文章もようやくここで終る。最後に句点が置かれ、ソネが完結する。四行詩二つ、三行詩二つの複合的な文章も、結局はただ一つの文章であったわけだ。

Quand — 「そのとき」いつのことなのか。前詩節にかかるのか、この詩節にかかるのか。前詩節と見做せば、意味はこうなる。「沈んだ運河に曙が白鳥の翼のように、その光を四方に広げた、そのとき」「この町は厳かに私に教えたのであった」(*solennellement cette cité m'apprit*) 「厳かに」という長い副詞に、マラルメのベルギー講演の晴れがま

しさを思い浮べることでもできようが（《ブリュージュ行きの理由はまさしく厳かなものであった。なぜなら彼は一人の偉大な作家について語るために、講演者として赴いたからだ》ヌーレ）⁽³⁵⁾、しかしこれはやや思い過ごしのような気がする。なぜ「厳か」であるのか。それはこの町がマラルメに教えたその内容に関わっている。その内容はきわめて神聖な、重大なことであった。第二・第三詩行がこれである。

Lesquels entre ses fils un autre vol désigne
À prompte irradiier ainsi qu'aile l'esprit.

第三詩行目は統辞的にやや錯綜しているので、分り易く並べ替えてみる。

A irradiier l'esprit ainsi qu'(une)aile prompte.

「素早い翼のように、精神を四方に放射する」という意味である。それは誰なのか。このブリュージュの町の子である「エクセルシオール」の若い文人たちのうちの誰なのか（《*Lesquels entre ses fils*》）。もっとくだけた言い方をすれば、才能を発揮し、栄光に包まれ、有名になるのは誰なのか、それをブリュージュという町が示したのである。曙光はもちろん、文芸復興期のベルギー文学やブリュージュの文学の、その未来に満ちた前途を示唆したものであるが、それと同時に、一緒に連れ立って歩いている若い文学者ひとりひとりの前途をも示唆している。ただ「この町は～なのは誰なのかを私に教えてくれた」（*cette cité m'apprit / Lesquels* ～）という表現は微妙であって、自分のまわりにいるこの人々が必ずしもすべて才能があるわけではない、という意味を言外に含んでいる。事実、ベルギー文学の、特にベルギー象徴主義文学の担い手たちは、ロデンバック、ヴェルハーレン、メーテルランク、モッケル、ピカール、モースなどであったが、これら才能に恵まれた文学者や批評家たちにゆかりの地は、ブリュッセルであり、ガンであった。ブリュージュからはたいした文学者は生まれなかったと言ってよい。彼らの才能のなさは、二言三言、彼らと話しを交わしただけで、マラルメにはすぐにそれと分ったことだろう。それをこのように、やや微妙な言い方ながらも、前途を祝す形で表わしたマラルメの態度は、いかにも礼儀正しい人らしく、その優しい人柄をしのばせる。あるいは、人によっては、ここにマラルメの皮肉を感じ取るかもしれないが。

この最終詩節についてはシトロンが簡潔に要約しているので、それを引用しよう。

《ブリュージュは私に教えてくれた、白鳥の飛翔とは異なる別の飛翔によって（モーロンにとっては、それは時間の飛翔であり、ヌーレの場合はインスピレーションの飛翔だが）、素早い翼のように精神を放射する（精神を輝かす）者として選ばれたのは、この町の息子たちの中の誰なのか、ということ。》

先ほど見たように、統辞的には *prompte* で終るのが自然なのだが、それをマラルメは *l'esprit* で終結させた。むろん、脚韻の問題もあるだろう。しかし、*ainsi qu'aile l'esprit* というように、*aile l'esprit* という特異な〔l〕音の連続によって、無音の〔ə〕のために、どう

しても *aile* と *l'esprit* との間に *pause* を入れなければならなくなる。その結果、*l'esprit* が独立して存在する印象が強まる。独立した *l'esprit* は、*l'aube, solennellement, irradier* などの周囲の発光する語に包まれて、それ自体がひとつの「曙光」のように光輝いて見えるのだ。

結 び

Bruges という名はネーデルランド語の《橋》を意味する Brugge から来ている。まさしく運河に囲まれた水の都である。またヤン・ファン・アイクやメムリンクにゆかりの芸術都市でもあり、金銀細工やレース織物の職人の町でもある。町全体は、その起源が十三世紀に遡ると言われる伝統的なベギース会修道院や、他の数々の宗教的建造物に抱かれて、静謐で質素な佇いを見せている。通りを歩く人影もまばらである。ときおり修道院の中庭を、白頭巾に黒衣の尼僧が、運河の白鳥のように音もなく横切ってゆくのが見える。いや、ロデンバックによれば、白壁に囲まれたブリュージュという町そのものが、《石の白衣をまとして跪いた》《「信仰深い女」》⁽³⁷⁾ 一人の修道女なのだ。霧と香と信仰に包まれ、閉ざされた孤独なこの町は、いかにもマラルメ好みの町である。その町の姿をこのソネはよく表わしている。けれども実際は、現実のブリュージュは、それほど暗くも、輪郭が曖昧でもなかったのではあるまいか。もっと透明で、明るくさえあったのではなかったか。⁽³⁸⁾ ヤン・ファン・アイクやメムリンクの絵を見る限り、そんな印象を拭えないでいる。はからずも、ロデンバックの小説の成功と、世紀末象徴主義の風土に慣れたパリの眼差しとが、ベルギーの一地方都市を、このように伝説の霧で覆ったのではないかとすら思える。マラルメもまたその一人であった、と。

(平成元年9月1日受理)

註

- (1) Charles Baudelaire, *Argument du livre sur la Belgique, Oeuvres complètes*, biblioth. de la Pléiade, 1954, p. 1296.
- (2) Stéphane Mallarmé, *Oeuvres complètes*, biblioth. de la Pléiade, 1974, p. 78.
- (3) Émilie Noulet, *Vingt poèmes de Stéphane Mallarmé*, Droz, 1972, p. 223.
- (4) Stéphane Mallarmé, *Oeuvres complètes I*, Flammarion, 1983, p. 405.
「エクセルシオール」の記念刊行物に掲載された後、このソネは *L'Art littéraire* 誌に二度掲載されたが、この雑誌をブリュッセルの雑誌と記してあるものと(プレイヤード版など)、パリの雑誌と見做しているものがある(フラマリオン版など)。現在のところ、どちらの雑誌であるかは不明である。
- (5) Noulet, *op. cit.*, p. 226.
- (6) *Mallarmé edited with an introduction and prose translations by Anthony Hartley*, Penguin Books, 1970, p. 70.
- (7) 『マラルメ詩集』岩波文庫, 1976, p. 86.
- (8) 『マラルメ詩集』ほるぶ出版, 1983, p. 72.
- (9) Stéphane Mallarmé, *Poésies, Lettres Françaises*, Paris, 1986, p. 284.
- (10) *vétusté* 説はシトロン, *pierre* 説は数多くの研究者が唱えている(ヌーレ, ファーヴル, シャッセ, モーロンなど)。
- (11) Noulet, *op. cit.*, p. 227.

- (12) Mallarmé, *Oeuvres*, Éd. Garnier, 1985, p.509.
- (13) *Ibid.*
- (14) Charles Mauron, *Mallarmé l'Obscur*, Corti, 1968, p.101.
Charles Chassé, *Les clefs de Mallarmé*, Éd. Montaigne, p.154.
- (15) Stéphane Mallarmé, *Poésies*, *op. cit.*, pp.283—284.
- (16) *Mallarmé by A. Hartley, op. cit.*
- (17) 例えば、モーロン、シャッセなど。
- (18) J.-P. Richard, *L'Univers imaginaire de Mallarmé*, Éd. du Seuil, 1961, p.226.
- (19) Albert Thibaudet, *La poésie de Stéphane Mallarmé*, Gallimard, 1926, p.147.
- (20) ジョルジュ・ロデンバック『死都ブリュージュ・霧の紡車』（田辺保・倉智恒夫訳）「フランス世紀末文学叢書・8」国書刊行会, 1984, pp.13—14.
- (21) 同書, pp.52—53.
- (22) Georges Rodenbach, *Oeuvres*, Slatkine Rep., 1978, p.292.
- (23) Stéphane Mallarmé, *Correspondance III*, Gallimard, 1969, p.177.
- (24) *L'Amitié de Stéphane Mallarmé et de Georges Rodenbach*, Pierre Cailler Éditeur, Genève, 1949, p.119.
- (25) *id.*, p.36.
- (26) このあたりの事情については、シトロロンが説明している。その口ぶりはきわめて慎重ながらも、彼はこのソネと『死都ブリュージュ』との間にある種の間接関係を認めている。《そこから、マラルメがこの作品から靈感を得たと結論づけることはできない。二つの作品の類縁性はきわめて曖昧であり、二人の人間が感じ取るその感受性が類似したものである、というところから来ているのかもしれない。しかしながら、《la pierre veuve》とか《défunt canal》とかいった表現が、ロデンバックの小説の表題を想起させることも大いにあり得る。》(Stéphane Mallarmé, *Poésies*, *op. cit.*, p.283.)
- (27) Mallarmé, *Oeuvres*, Éd. Garnier. p.509.
- (28) Mallarmé, *Correspondance IV*, Gallimard, 1973, p.35.
- (29) *id.*, p.61.
- (30) Baudelaire, *op. cit.*, p.1314.
- (31) François Vermeuleu, 《Stéphane Mallarmé à Bruges》, *Bulletin officiel de l'Association des écrivains belges*, XVII^e année, no. 8—10, août—oct., 1953, pp.817—819
(Stéphane Mallarmé, *O. c. I*, Flammarion, p.404.)
- (32) Rodenbach, *op. cit.*, p.293.
- (33) Noulet, *op. cit.*, p.229.
- (34) Stéphane Mallarmé, *Poésies*, *op. cit.*, p.284.
- (35) Noulet, *op. cit.*
- (36) Stéphane Mallarmé, *Poésies*, *op. cit.*
- (37) 『死都ブリュージュ・霧の紡車』, 前掲書, p.87.
- (38) このことについては上記訳書の月報において、遠山博雄氏が「ブリュージュを殺した(?) 詩人」と題して興味深い一文を寄せておられる。